

ヘーゲル推理論とマルクス価値形態論

尼 寺 義 弘

はじめに

マルクスの価値形態論は、初版『資本論』「本文」および「附録」さらには現行版の叙述のなかに垣間見られるように、ヘーゲル論理学との関連を予想させるものである。なかでも初版「本文」の脚注(二〇)は、きわめて注目すべき見解をつぎのように表明している。

「経済学者たちが、もっぱら素材にたいする関心に影響されて、相対的価値表現の形態内実 (Formgehalt) を見落したのは不思議ではない。というのは、ヘーゲル以前には、専門の論理学者たちでさえ、判断例と推理例の形式内容 (Forminhalt) を見落したのだからである。」⁽¹⁾

この脚注は、初版「本文」の形態Ⅰ、つまり「相対的価値の第一のまたは単純な形態」の第七パラグラフの末尾に付けられた注である。第七パラグラフは「われわれは、ここで、価値形態の理解を妨げるあらゆる困難の軸点に立っている」という文章で始まり、価値

形態における使用価値または商品体の「新しい役割」とその根拠となる「回り道」について述べ、さらに価値関係の「質的側面」からの考察が価値形態の、したがって貨幣の「秘密」の発見に結びつくことを論じた重要な一節である。われわれは以下においてこの脚注で述べられていることを明らかにしたい。(傍点は原文の隔字體およびイタリック體を示す。以下同様——引用者)

ところで、ヘーゲルによる概念↓判断↓推理という概念論の展開は、普遍・特殊・個別からなる概念の自己分化と自己還帰の過程として弁証法的方法の要諦をなすものである。

マルクスはヘーゲルのこの方法を価値形態論のなかでどのように生命あるものとしているのであろうか。『資本論』第二版後記は述べている。

「私は自分があの偉大な思想家(ヘーゲル)の弟子であることを卒直に認め、また価値理論に関する章のあちこちでは彼に特有な表現様式に媚を呈しさえしたのである。」⁽²⁾

さらにレーニンも『ヘーゲルの「論理学」の摘要』のなかでつき

のように述べている。

「ヘーゲルの推理論の分析 (E. — B. — A. 個別、特殊、普通、B. — E. — A. 等々) を見ると、マルクスが第一章でヘーゲルにならっているのが思い出される。」⁽³⁾

「ア・フ・オ・リ・ズ・ム——ヘーゲルの『論理学』の全体をよく研究し理解しなければ、マルクスの『資本論』、とくにその第一章を理解することはできない。だから、マルクス主義者のうち誰も、半世紀もたつのに、マルクスを理解しなかったのだ!!」⁽⁴⁾

このようにマルクスが媚を呈し、そしてレーニンが提起した問題は、思弁に陥ることなく、個別のテーマに即して具体的に論じられねばならない。

われわれはこの問題を検討するにあたり、まずヘーゲルの推理論の展開方法とマルクスの価値形態論のそれについて論究し、つぎに両者に流れる弁証法的方法について考察する。⁽⁵⁾

注

- (1) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, 1. Aufl., Hamburg 1867. S. 21.
- (2) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, In: K. Marx/F. Engels Werke, Bd. 23, Dietz Verlag Berlin 1958 ff. S. 27.
- (3) W. I. Lenin, Konспект zu Hegels „Wissenschaft der Logik“, In: W. I. Lenin Werke, Bd. 38, Dietz Verlag Berlin 1981. S. 168. レーニン『哲学ノート』(松村一人訳) 第一分冊、岩波文庫、一九六四年、一五三—一五四頁。
- (4) Ebenda, S. 170. 同書、一五七頁。
- (5) ヘーゲル判断論とマルクス価値形態論の関係については、拙著『価値形態論』(青木書店、一九七八年) 第八章を参照されたい。

一 ヘーゲルの推理論

(一) 推理論の位置づけ

周知のようにヘーゲルの論理学は有論・本質論・概念論からなり、概念論は「主観性」・「客観性」・「理念」より構成される。

「主観性」は概念論・判断論・推理論と展開され、形式論理学の原理論に相当する。この「主観性」の展開は、大まかにいって、概念が自己自身を分化させ、再び自己自身へ還帰する過程である。あるいはまた、統一—分裂—再統一、あるいは、同一—区別—同一、あるいは、単純—複雑—単純 という過程である。

(a) 概念は、普遍・特殊・個別という三つのモメントよりなり、萌芽における生命の単純な自己同一性である。形式論理学では概念は抽象的普遍あるいは共通性のことである。

(b) 判断は、主語と述語との繋辞による結合であるが、概念の根源的な自己分割であり、諸モメントが独立化したものである。

(c) 推理論は、判断と判断との結合による概念の自己自身への復帰である。つまり判断において自立化した概念の諸モメントが、媒辞により有機的連関において再び統一されることである。「推理論はその諸モメントを媒介する円環運動」⁽¹⁾である。

(二) 形式的な悟性推理論の批判

ヘーゲルは形式的な悟性推理論、たとえば定言三段論法を根本的

に批判し、その形式に含まれる内容を明らかにし、独自の推理論、個別―特殊―普遍を構築する。たとえばつぎの推理をみよう。⁽²⁾

このバラは赤い、

赤は色である、

ゆえにこのバラは色をもつものである。

この推理において、主語(このバラ)である個別は、その一つの特異な質(赤)を媒介として、普遍(色)と結合される。形式論理学では、このように、バラが赤に包摂される。そして赤は色に包摂される。だからこの推理は正しい推理である、というように概念の内包・外延関係より推理をみるのである。したがって事物の本質とは何か、推理はその本質をどのように把握し、叙述するかというような認識論的思考は形式的推理では問題とならない。概念のいわば表面的な関係が推理形式で述べられているといえる。

ヘーゲルは普通の論理学で取り上げられるこうした推理のもつ欠陥を鋭く批判する。すなわち主語は多くの規定性(バラの諸性質)をもつ直接に経験される具体物である。ところが媒辞はそれらの規定性のうちのただ一つの規定(赤)にすぎない。さらに媒辞もまた主語と同様に多くの規定(赤の諸性質)をもつことから、同じ媒辞によっても多くの異なる普遍に連結される。したがってこの推理は必然性の関係をもつものではなく、全く偶然的なものである。

形式的な悟性的推理は、このように、両項およびそれを媒介する媒辞も、内的な統一の欠如した結合、相互に外的な関係にある推理である。したがってこの推理は、真の媒介をもたない直接的で抽象的な推理である。つまりこの直接的な推理においては、ヘーゲルが述べているように、「主語は自己とは別な一つの規定性と結合される。あるいは逆に言えば、普遍はこの媒介を通じて自己に外的な主語を包摂する。これに反して理性的推理は、主語が媒介を通じて自己を自己自身と結合することである。」⁽³⁾

ヘーゲルの推理論は単なる主観的な思惟の形式とは異なり、事物の有機的連関を、生命をもつ有機体の自己運動、自己媒介の原理を明らかにする。それはちょうどヘーゲルの概念が、形式論理学のそれのように共通性としての抽象的普遍ではなくて、普遍・特殊・個別の統一として、具体的普遍として展開されるのと同様である。^注

注 ヘーゲルは形式的推理の欠陥について、それは「推理の形式が単に抽象的な、したがって概念を欠く形式としてある点にある」としている。すなわち推理の形式を支えるべき概念が、「概念を欠く質」⁽⁴⁾・無概念な規定であり、形式に全く適合してはいないのである。そして形式的推理の真理は無概念な数学的推理「A—A—A」にあると結論づけている。⁽⁵⁾

(三) 推理論の構造

ヘーゲルの推理論は、A 定有の推理 B 反省の推理 C 必然性の推理 から構成される。

A 定有の推理「E—B—A」は、さきにもた「バラの推理」のような形式的推理を取り扱う。第一格より第四格まで諸格が分析されるが、この推理の諸規定は「自己に關係する諸規定性」にとどまり、直接的で抽象的で個別的である。媒辞によって両項のあいだに一つの關係が示されるが、この關係は主語の概念を表現するものではなくて、事物のたんなる表面的な關係を示すにすぎない。したがってこの推理はもっとも貧弱な推理である。さらにこの推理は自己の前提を他の定有の推理に依存している。たとえば第一格、E—B—Aは、E—BおよびB—Aを結論とする二つの推理を、すなわち第二格および第三格を前提としている。かくして真の媒介である自己媒介は定立されていない。

B 反省の推理「B—E—A」は、a 全称性の推理、b 帰納の推理、c 類比的推理 と展開され、定有の推理から一步進み、個別と普遍との相關關係がテーマとされる。すなわち相互の「映現」や必然的關係が定立されるようになる。こうして質的推理の各名辞のもっていた抽象性や個別性が止揚される。

反省の推理の媒辞は、したがって「諸規定の全体性」、両項の最初の「定立された統一」、「反省の統一」である。反省の推理はこうして事物の表面的な、外面的な關係から、本質的な、必然的な關係を把握する推理への階段をなしている。そしてこの反省の推理の内部の進展においても、自己の前提の根拠そのものの真理性を探究する過程として、偶然的な關係より必然的な關係へと展開される。

a 全称性の推理「E—B—A」は、周知のつぎの例で示され

る。

すべての人間は死す、
 と・こ・ろ・で・ガ・イ・ウ・ス・は・一・人・の・人・間・で・あ・る、
 故にガイウスは死す、

ヘーゲルによれば、この推理の媒辞「すべて」は、すべての個別のことである。だから媒辞は、すでに直接に結論となる述語「死す」を含んでおり、推理によってはじめてこの述語を得たわけではない。大前提はすでにそれ自身のうちに結論を前提しており、したがって結論が正しいがゆえに大前提も正しいにすぎない。こうして全称性の推理は、個別が連結する媒辞をなす帰納を導くのである。

b 帰納の推理「A—E—B」はつぎの形式をとる。

特。 — 個 個 …… 無限に。
 普 — 個 個 …… 無限に。

帰納の推理は経験の推理であり、媒辞は「すべての個別」である。帰納法は「ライオン、象等々のものが四足獣の類を構成する」というように、多くの個別を類へと主観的に綜合するが、本質的にはいまだ必然性のない推理である。つまり個別と普遍との統一は「果てしなき當為」である。「個別」a、b、c…という経験の無限進行が類を形成するが、すべてをつくすことはできない。この欠

陥を止揚するものとして類比的の推理が導かれる。

c 類比的の推理「E—A—B」は類推である。ヘーゲルはつぎの例をあげている。

地球は住民をもつ、
月は一つの地球である、
故に月は住民をもつ。

この推理の媒辞は「地球」であり、個別であるとともに普遍(類)である。この推理は「二つの対象が一つ、または若干の属性において一致するときは、一方のものには他方のものもつ、もう一つ別の属性も属する」ということを前提としている。個別と普遍との統一としての媒辞は、一つの質であるが、それが主観による徴表あるいは経験的な内容とされ、同一性が類似性とされると、この推理は「皮相なもの」となる。つぎに必然性の推理をみることにしよう。

C 必然性の推理「E—A—B」は、定有の推理および反省の推理を前提し、両推理の不充分性を解決する完全な推理である。媒辞は「一つの充実した、しかも単純な普遍性であり、事物の普遍的本性、すなわち類」である。両項は媒辞のなかで自己反省し、「内的同一性」をもつこととなる。「媒辞の内容規定は両項の形式規定であり」⁽¹³⁾、内容と形式の一致がえられ、各名辞は一つの必然的な契機をなしている。必然性の推理は、a 定言推理 b 仮言推理 c 選言推理 と展開される。価値形態論との関連で重要であるので少

し詳しくみることにしよう。

a 定言推理「E—B—A」は、定言判断を前提し、媒辞は「客観的普遍性」である。つぎの例を掲げよう。

金は金属である、
諸金属は諸エレメントである、
故に金属としての金は一つのエレメントである。

媒辞(金属)は、個別の「本質的な本性」(実体)であり、推理全体を貫いている。媒辞は両項の「内容に充ちた同一性」、「実体的普遍性」、「類」⁽¹⁴⁾である。しかし両項の媒辞に対する関係は、概念的関係にまでは到達せず、いまだ無関心な、主観的な側面を残している。つまり金はエレメントである、とは言えるが、逆に、エレメントは金である、とは言えない関係にある。その意味でこの推理には偶然性、無関心性がなお残存する。つまり媒辞と両項の関係は完全には媒介されあっていない。この不充分性はつぎの仮言推理により解決される。

b 仮言推理「A—E—B」は、仮言判断を前提する。つぎの例をみよう。

もしAがあるなら、Bがある、
ところでAはある、
故にBがある。

仮言判断は二つの規定性(AとB)の必然的な連関を表現し、仮言推理はこの判断にAの存在を加え、Bの必然性を結論づける。両項は直接的な有ではなくて、必然性のもとにある有、「止揚された有」であり、互いに制約関係にある。両項の必然的な連関が「一つの個別性のなかへ総括される有」(媒辞)によって定立される。しかしBの存在はAに依存するという前提は残り、完全なモメントとはなりきってはいない。この不充足性はつぎの選言推理で解決される。

c 選言推理「E—A—B」は、定言推理および仮言推理を前提し、媒介するものと媒介されるものとの統一である。かくして選言推理の媒辞は「形式によって充足された普遍性」、「全体性」、「展開された客観的普遍性」である。それゆえこの媒辞は、普遍性であるとともに特殊性でもあり個別性でもある。すなわち媒辞は普遍性として「類の実体的同一性」であり、特殊性として類の実体的同一性の「特殊化の全体」をうちに含み、「諸々の種に分かれた類」である。したがって、

「AはBであるとともに、またCでもある、またDでもある。」
— Sowohl ~ Als — (同一の側面)
「AはBであるか、Cであるか、Dであるかである。」 — Entweder ~ Oder — (区別の側面)

かくして類は同一と区別との統一として定立される。区別の側面は諸規定の「否定的統一」、互いの排斥であり、「他の個別性の排斥を伴う個別性としての特殊である」。

かくして選言推理は、ヘーゲルによれば、つぎのとおりである。

AはBであるか、Cであるか、Dであるか、である、
ところがAはBである、
故にAはCでもなく、Dでもない。

あるいは同じことであるが、

AはBであるか、Cであるか、Dであるか、である、
ところがAはCでもなく、Dでもない、
故にAはBである。

Aは三つの命題においていずれも主語の位置にある。第一前提では「普遍」であり、第二前提では「規定的なもの」、「一つの種」であり、結論では「排他的な個別的規定性」である。あるいは後者の推理のように、Aは小前提ですでに排他的な個別性として規定され、結論ではA本来のものとして定立される。このように媒介するものと媒介されるものはいずれもAの普遍性である。概念の全体性としてこの媒辞は自己のうちに両項を完全に含んでおり、両項は被測定有、モメントに落される。ここに媒介するものとされるものと統一が定立され、推理論は完結する。

以上のようにヘーゲル推理論の展開を簡単にみてきた。ヘーゲルの述べたことは、(一)バラの推理にみられるように、伝統的な形式的推理の根本的な批判である。(二)その前提にたつて、独自の推理論の

構築つまり、E—B—Aによる有機的連関の把握であるといえる。
つきに価値形態をみることにしよう。

注

- (1) G. W. F. Hegel, Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften, I, In: G. W. F. Hegel Werke in zwanzig Bänden, Werke 8, Suhrkamp, Frankfurt a. M. 1970, S. 332. 松村一人訳 『小論理学』上巻、岩波文庫、一九五二年、一五八頁。
- (2) Ebenda, S. 335. 同書、一六二頁。
- (3) Ebenda, S. 333. 同書、一五九頁。
- (4) (5) G. W. F. Hegel, Wissenschaft der Logik, II, In: Werke 6, S. 377. 武市健人訳 『大論理学』下巻、岩波書店、一九六一年、一五五—一五六頁。
- (6) Ebenda, S. 354. 同書、一三二頁。
- (7) Ebenda, S. 362-363. 同書、一三九—一四〇頁。
- (8) Ebenda, S. 380. 同書、一五九頁。
- (9) Ebenda, S. 382-383. 同書、一六二頁。
- (10) Hegel, Enzyklopädie, I, S. 342. 『小論理学』下巻、一七二頁。
- (11) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 384-386. 『大論理学』上巻、一六四—一六六頁。
- (12) Ebenda, S. 388-389. 同書、一六九頁。
- (13) (14) Ebenda, S. 391-394. 同書、一七二—一七四頁。
- (15) Ebenda, S. 395-396. 同書、一七六—一七七頁。
- (16) (17) (18) Ebenda, S. 398-399. 同書、一八〇—一八一頁。
- (19) ヘーゲルの推理論について詳しくは、牧野廣義「ヘーゲルの推理論と形式論理学」(大阪経済法科大学『経済学論集』第七卷、第四号所収、一九八三年)および拙稿「ヘーゲルの推理論」(一)、『阪南論集』人文・自然科学編、第二十六卷、第三号、同第四号所収、一九九一年)参照。

二 マルクスの価値形態論

最初に述べた初版『資本論』の脚注(二〇)を再び取り上げよう。
この脚注の付された本文は、すでにみたように、形態Iの第七パラグラフである。このパラグラフの末尾でマルクスはつぎのように述べている。

「もし単純な相対的価値表現 x 商品の商品A = y 商品の商品Bのなかに、ただ量的関係だけを考察するとすれば、そこで見いだされるのは、やはりただ、上述の相対的価値の運動にかんする展開された諸法則だけであって、これらの法則は、すべて、諸商品の価値量はそれらの商品の生産に必要な労働時間によって規定される、ということに基づいているのである。しかし、両商品の価値関係をその質的な側面から考察するならば、かの単純な価値表現のなかに、価値形態の、したがってまた、簡単に言えば、貨幣の秘密を発見するのである。」⁽¹⁹⁾

ここで述べていることは、 x 商品の商品A = y 商品の商品B と z 商品の商品C = w 商品の商品D において、量的側面を捨象し、 A 商品 = B 商品あるいは、 x 商品 = y 商品 として、この価値関係の質的側面、すなわち、リンネル価値の上着体による表現の形態内実を発見することである。そのためには価値概念と価値形態との関連について述べる注
ことが不可欠である。

注 x 商品の商品A = y 商品の商品B と z 商品の商品C = w 商品の商品D のなかに、

量的関係のみを見ることは、ちょうど、形式的推論が、関係する概念の内包・外延という包摂関係、いわば量的関係のなかにのみ「正しい推論」をみる見方に通じるものである。この見方は、すでに述べたように、ヘーゲルが無概念な形式規定を厳密に批判し、そのうえで「形式内容」を把握する重要性を指摘したとおりである。

(一) 価値概念と価値形態

マルクスは初版『資本論』本文の「価値形態」を結ぶにあたりつぎのように述べている。

「しかし決定的に重要なことは、価値形態と価値実体と価値量とのあいだの内在的で必然的な連関を発見すること、すなわち観念的に表現するならば、価値形態は価値概念から発生することを証明することであった。」⁽²⁾

右の結論は、マルクスがそれまでに行った商品の分析を価値に即して要約したものであり、概念的把握の方法を具体的に例示したものと見える。すなわち価値の形態・実体・量という三者の経済的形態諸規定の「内在的で必然的な連関を発見」し、その前提のもとで、この「連関」の叙述は、価値概念からの首尾一貫した論理展開によってなされること、つまり「価値形態は価値概念から発生することを証明する」ことにある。この「証明」の方法は、『資本論』第一巻、「第二版後記」でつぎのようにマルクスの述べていることと対応している。

「もちろん叙述の仕方は、形式上、研究の仕方とは区別されなけ

ればならない。研究は素材を細部にわたってわがものとし、素材のいろいろな発展諸形態を分析し、これらの発展諸形態の内的な紐帯を探りださなければならぬ。この仕事をすっかりすませてから、はじめて現実の運動をそれに応じて叙述することができるのである。これがうまくいって、素材の生命が観念的に反映することになれば、まるで先験的な構成がなされているかのように見えるかもしれないのである。」⁽³⁾

価値概念から価値形態を展開することはまさに「先験的な構成」の過程といえる。もちろん叙述の過程には厳密な研究・分析の過程が前提される。

ところで、価値形態のこうした把握の仕方は、古典派経済学にとって問題としても意識されていない。マルクスは述べている。

「古典派経済学の根本欠陥の一つは、商品の、また特に商品価値の分析から、価値をまさに交換価値となすところの価値の形態を見つけたことに成功しなかった、ということである。」⁽⁴⁾

あるいはまた

「ところで、経済学は不完全ながらも価値と価値量を分析してはきた。経済学はなぜ労働が価値に表わされるのか、そしてその継続時間による労働の計量が価値量に表わされるのか、という問題はいまだかつて提起したことさえなかった。」⁽⁵⁾

このようにA・スミスやD・リカードのような最良の代表者たちでさえも把握しえなかった価値の形態をマルクスはどのようにして把握したのであろうか。価値概念の確定からみることにしよう。

周知のように、マルクスは商品の交換価値の、したがって二商品の交換関係の分析から価値の実体として抽象的人間労働を析出している。この質の極点である抽象的人間労働が、商品生産の社会では一つの社会的紐帯の役割を果たしており、したがって社会的労働である。まさに社会的労働としての抽象的人間労働の結晶が商品の価値なるものである。商品の価値はしたがって一つの社会的なものであり、直接目で見たり、手で触れたりすることはできない。それゆえ価値は交換価値として現象するのであり、価値それ自体は商品所有者の「表象」や経済学者の「頭脳」において観念的にとらえられたいわば「一つの思惟物」⁽⁶⁾、「抽象物」⁽⁷⁾である。この思惟物がどのようにして現象するのか。これが商品の価値がいかにして表現されるか、という価値の表現形態の、したがって価値形態の問題である。

価値形態を理解する困難は、等価形態の商品の使用価値が「一つの新しい役割」を演ずること、すなわちその使用価値が価値の現象形態となること、さらにその使用価値に含まれる具体的有用労働が抽象的人間労働の実現形態となること、それを理解することにある。商品の対立する二規定は、ここでは互いに「反省」しあう。

ニクネマニトウにおいて、リンネルの価値は上着で表現される。ではいかにしてか。リンネルは上着を自己に等価物として等置することによってである。すでに述べたように商品は自己の価値を直接に表現することはできないが、他商品の商品体を自己の価値鏡とすることはできる。すなわち「商品は直接に自己自身にたいしてなしえないことを、直接に他の商品にたいして、したがって回り道

をすることによって自己自身にたいしてなすことができる。」⁽⁸⁾こうして価値形態の回り道と両極の形態規定が把握される。古典派経済学はこの問題に気づいていない。つきに価値概念から貨幣形態までの展開過程をみることにしよう。

(二) 価値形態の展開

価値概念から単純な価値形態、全体的価値形態、一般的価値形態、貨幣形態へとという展開過程・叙述の過程は、周知のように、現実の表象にある貨幣形態から価値概念への遡及・分析の過程、探究の過程が前提されている。マルクスは述べている。

「貨幣形態の概念における困難は、一般的等価形態の、したがって、一般的価値形態一般の、形態Ⅲの、理解に限られる。しかし、形態Ⅲは、逆の連関で形態Ⅱに分解し、そして形態Ⅱの構成要素は、形態Ⅰ、すなわち $20\text{Hm} \ominus \text{ニクネマニトウ}$ または $\times \text{ニクネマニトウ}$ の ニクネマニトウ である。それゆえに単純な商品形態は貨幣形態の萌芽なのである。」⁽⁹⁾

このように貨幣形態からの遡及・分析による形態Ⅰの定立は、探究の過程の成果である。価値概念から貨幣形態を証明する叙述の過程はこの成果を前提する。このことは貨幣の必然性の証明の過程が、無前提な価値概念の自己展開の過程ではけっしてないことを示している。マルクスの述べるように、「ただヘーゲル的な『概念』⁽¹⁰⁾だけが外的素材なしに自己を客観化」するのである。初版「付録」以降、マルクスはこの遡及・分析の過程を明示している。

単純な商品形態または形態Ⅰにおいて、価値の形態と実体と量との関係が純化されて提起される。そして形態Ⅰは、さきに述べた価値の概念が自己の定有形態を獲得する最初の形態である。それは「貨幣」の「細胞形態」、「即・自態」⁽¹⁰⁾である。形態Ⅰで明示される価値表現のメカニズムはすべての価値形態を貫いている。その意味で形態Ⅰは個別であって同時に普遍である。

各価値形態の特徴を簡単にみると、形態Ⅰは、一商品の価値がある他の一商品の使用価値で表現される価値形態である。形態Ⅱは、一商品の価値が他のすべての商品の使用価値で表現される価値形態である。形態Ⅲは、すべての他の商品の価値が唯一の商品の使用価値で表現される価値形態である。なお貨幣形態は形態内実からみて形態Ⅲと同一である。

以上のように、われわれは価値概念と価値形態の関係および各価値形態相互の関係を簡単にみてきた。最後にこの問題がヘーゲルの推理論とどのように結びついているかを検討する。

注

- (1) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, 1. Aufl., S. 20-21.
- (2) Ebenda, S. 34.
- (3) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 27.
- (4) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, 1. Aufl., S. 34-35.
- (5) Ebenda, S. 41.
- (6) Ebenda, S. 17.
- (7) Ebenda, S. 769.
- (8) Ebenda, S. 20.

- (9) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 85.
- (10) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, 1. Aufl., S. 18.
- (11) Ebenda, S. 15.

三 ヘーゲル推理論とマルクス価値形態論

われわれはこれまでヘーゲルの推理論とマルクスの価値形態論について検討してきた。両者の関連はどのようなものであるかをここでは分析する。この問題を論ずるにあたり、推理論では媒辞の位置づけが、価値形態論では形態Ⅱのそれが重要である。

さて、価値形態の理解において、従来、形態Ⅰから形態Ⅲまでの価値形態の「展開・移行」⁽¹¹⁾の動力は、価値の概念と価値の表現形態(定有様式)との矛盾であり、この矛盾の一定の解決形態として各価値形態の位置づけがなされてきた。われわれもこの見解を妥当なものとする。そのことを前提にしたうえでさらにつきの問題が残ることになる。何故に価値形態は三つの形態をとって表現されねばならないのか、そしてまたこれら三つの形態は互いにどのような関係にあるのか、という問題である。この問題を考察するにあたり、われわれはヘーゲルの概念・判断・推理の論理構造、とりわけ推理論が深く結びつくと考えている。

形態Ⅰは「単純な、個別的な、または偶然的な価値形態」⁽¹²⁾である。形態Ⅰは、二〇エレのリンネルは一着の上着に値するものであるとして表現される。この表現は、リンネル商品が自己の思想を

「商品語」で語った一つの判断形式とみることができる。つまりリンネルは「自己」を一つのそれ自身において分化したもの (ein in sich selbst Differenzirtes) として表示する。これはヘーゲル判断論の生誕すなわち概念の根源的分割による判断の生成と同様に、価値形態は価値概念が自己の最初の定有形態をもつことであり、いわばリンネル商品の価値判断である。形態Ⅱ、形態Ⅲも同じように一つの判断形式とみることができる。

ところで、形態Ⅰは「商品の価値をまったく制限的・一面的に表現して」おり、価値の概念に照らして不十分な価値形態である。この不充分性は形態Ⅱ「全体的な、または展開された価値形態」において解決される。形態Ⅱは形態Ⅰの合計であるが「本質的な進展」がみられる。「リンネルがその価値を上着で表現するとともに、コヒーでもその他のものでも表現し、この商品でか、それともあの商品でか、それともまた第三の商品、等々でか表現する、ということである。」⁽⁸⁾

この表現は選言判断の形式がとられている。形態Ⅱは „sowohl...als“ であり、 „entweder...oder“ である。等価商品は特殊的等価物としてリンネル商品の価値の分化したものの、選言肢である。この選言肢の全体でリンネル商品の価値がはじめて真に表現されることとなり、形態Ⅰの不充分性は解決される。

しかし形態Ⅱは、それが「未完成」であり、「雑然とした寄木細工」であり、したがって「統一性」のない価値形態である。そしてまた等価形態の選言肢は、いずれもが一般的等価物であろうとして

「互いに排斥しあう」⁽⁹⁾ 特殊的等価物にすぎない。

形態Ⅱのもつこれらの欠陥はどのように解決されるか。解決の条件は形態Ⅱそれ自体のうちにある。形態Ⅱは「即目的に」「逆の連関」⁽¹⁰⁾ で形態Ⅲ「一般的価値形態」を含んでいる。すなわちすべての他の商品が唯一の商品リンネルを共同的な価値の鏡として価値表現する。形態Ⅲはしたがって「単純」で、「統一的」で、「一般的」である。こうして「その一般的性格によってはじめて価値形態は価値概念に照応する」⁽¹¹⁾ こととなる。

ところで、リンネルは「等価物の類的形態」、一般的等価物である。「動物なるもの」、「神」のように「自己自身のうちに同じ事柄の実際に存在しているすべての種を包括している個別的なもの」⁽¹²⁾、すなわち価値の一般的化身である。

価値形態はこうして 形態Ⅰ↓形態Ⅱ↓形態Ⅲ と展開され、価値概念に普遍的に妥当する表現形態を獲得して完成する。等価物もこの展開に対応して、個別的等価物↓特殊的等価物↓一般的等価物となる。もちろんこの展開過程は、すでにみたように、貨幣形態から形態Ⅰへの遡及・分析の過程が、不可欠のものとして前提されている。

さて、形態Ⅰ↓形態Ⅱ↓形態Ⅲ という価値形態の展開は、推理形式からみれば、個別―特殊―普遍 の関係をなしている。特殊が個別と普遍とを結び合わせる必然的な「唯一の媒介項」⁽¹³⁾ の役割を果たしている。すなわち形態Ⅱは、その「基礎的要素」⁽¹⁴⁾ が形態Ⅰであり、さらにまた「相対的価値の倒置された、または逆の連関にさ

れた第二の形態」が形態Ⅲである。形態Ⅱは、価値形態が価値概念にふさわしい表現形態をとるための媒辞の位置を与えられている。形態Ⅱは、形態Ⅰと形態Ⅲに対して媒介する主語の位置にあり、価値形態全体を秩序ある統一の関係においている。マルクスは形態Ⅱにはわずかな紙幅しか与えていないけれども、論理的にみると、きわめて重要な役割を果たしているといえる。形態Ⅱを軸点として価値形態の種差(同一性と区別)が明示され、価値概念という生命が価値形態全体の有機性、統一性のうちに表現されている。

要約して言えば、価値表現の形式は、一商品の価値が他の一商品で表現されるか、あるいは、一商品の価値がすべての他の商品で表現されるか、あるいは、すべての他の商品の価値が唯一の商品で表現されるか、という三つの形態をとる。この三形態の「内在的で必然的な連関」が、価値概念の自立化すなわち判断形式、および判断形式相互の関係すなわち個別—特殊—普遍という推理形式によって明示されている。とりわけ推理論の完成形態である選言推理の構造は、価値形態の三つの形態のいわば三項関係の理解に大きな示唆を与えているといえる。^注

^注 ちなみに推理形式という観点から「資本論」の価値形態論と「経済学批判」⁽¹⁶⁾や「剰余価値学説史」⁽¹⁷⁾の生成途上の価値形態の叙述とを比較すれば、どれほど理論上の発展がなされているかがよく理解できる。

注

(一) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, 1. Aufl., S. 783.

- (2) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 63.
- (3) Ebenda, S. 66.
- (4) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, 1. Aufl., S. 16.
- (5) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 304. 「大論理学」下巻 七四頁。
- (6) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, 1. Aufl., S. 23.
- (7) (8) Ebenda, S. 24.
- (9) (10) Ebenda, S. 778.
- (11) Ebenda, S. 779.
- (12) Ebenda, S. 27.
- (13) 見田石介「資本論の方法」見田石介著作集、第四巻、大月書店、一九七七年、一八二頁。
- (14) (15) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, 1. Aufl., S. 24-25.
- (16) K. Marx, Zur Kritik der Politischen Ökonomie, In: Marx/Engels Werke, Bd. 13, Berlin 1961, S. 25 ff. 杉本俊朗訳「経済学批判」国民文庫、大月書店、一九六七年、三九頁以下参照。
- (17) K. Marx, Theorien über den Mehrwert, Teil 3, In: Werke, Bd. 26.3, S. 122 ff. 岡崎次郎・時永淑訳「剰余価値学説史」マルクス・エンゲルス全集、第二六巻、第三分冊、大月書店、一八七〇年、一六〇頁以下参照。

(一九九〇年十二月一日受理)